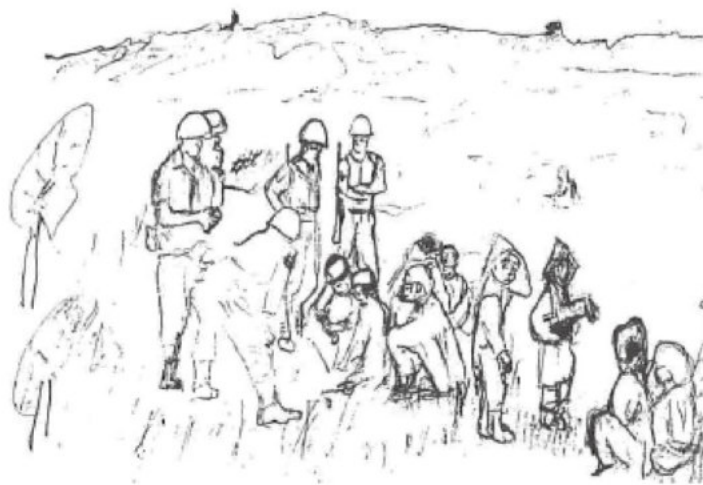


戦跡を歩く10

今年、沖縄戦終結から71年目を迎えます。ひとりひとりの戦争体験に真摯に耳を傾け、沖縄戦とは何だったのか、考えてみませんか。シリーズ10回目は、家族とともに、激戦地となった真栄平の集落で戦場の悲惨さ、恐ろしさをつぶさに体験した当時10歳の少年の証言を紹介します。



米兵に捕虜にされた待機中の私達
〈画〉金城 栄保さん

戦争は勝っても負けてもいいことはない
金城 栄保さんの戦争体験

●戦前の真栄平での生活

戦前は両親ときょうだい5人の7人家族。学校から帰ると、ヤギの世話や畑の手伝いで遊ぶ暇はなかった。ムラヤーには山部隊が駐屯し、宇江城の裏山に大隊本部があつて、毎日朝から晩まで人の畑で銃剣術や剣道など武道の練習をしていた。家の近くで練習していた3人のラッパ隊とは一緒に遊んだりした。休憩中に芋や豆腐をあげたらとても喜んだ。ほかに朝鮮人の軍属もいて、家に唐辛子をもらいに来ていた。

●真壁国民学校

1年生のときは防空訓練があつたが、何とか勉強もした。2年生からは勉強はほとんどなく、先生と一緒に兵隊の手伝いをした。道路補修や陣地構築の手伝い、軍馬の餌にする草刈りなど、国のためだと思つて一生懸命やつた。下敷きや弁当箱、制服のボタン、筆箱などの金属はみんな供出させられた。防火用砂を準備

するため、大度・米須の浜から砂を担いだこともあつた。10・10空襲のあとも通学したが、しばらくすると学校は軍が占領して閉鎖になつた。

●防空壕へ避難

1945年の3月末からは艦砲射撃が始まり、母ときょうだい5人で頑丈な岩の下で防空壕へ避難した。そこは、隣近所で準備していた場所。30人くらいが一緒に入つていた。

ある日の昼、壕の近くに爆弾が落ち、入口から真っ赤に燃えた破片が飛んできて、乳飲み子の末妹をだつて、こぼれた母の頭上で跳ね返つた。熱い破片が末妹の顔に落ちそうになつたが母が素手でつかんで外に投げ、無事だつた。食べ物も、毎朝、米軍の攻撃が始まる夜明け前の薄暗いなか、畑で野菜や芋をとり、家で炊いて壕で食べた。自分の畑があつたからあまりひもじい思いはしなかつた。水はア

ガリガーから家の水がめに運んでいた。時々洗濯もしていた。避難して2か月ほど経つた頃、銃剣を持つた日本兵が現れ、私たちの壕を奪つた。

●目の当たりにした戦場

5月半ばごろから避難民が押し寄せたが防空壕は足りない。弾が落ちるなか、防空壕に入らずに石垣の陰や焼け残つた家の軒下に隠れていたため、たくさんの人が死んだ。道はもう死んでいづばいだった。

朝5時、6時ごろには水くみに行く人でアガリガーは行列だつた。そこにトンボ（偵察機）が来て集中攻撃されることもあり、死体を脇に寄せて水をくんだ。倒れた人の顔をみる余裕もない。

片顔がなくなっている人もいた。軍服を着て雨に濡れたまま木の下に座つていたが、耳もノドも無いような状態で、見るに忍びなかつた。死ぬのはいいが大けがはしたくないと思つた。



【アバダガマ】

真栄平集落後方の自然壕。戦火が激しくなる前に住民が避難壕として使用する準備をし、住民の半数以上が避難していたとされる。日本兵による壕の追い出しがあつた。のちに真栄平区民の手によって「南北之塔」が建立された。

場所/字真栄平872



【アガリガー】

真栄平集落南東にある湧水地。地下の水源まで階段で昇り降りしなくてはならなかつたが、水質が良く水量も豊富で主要な水源だつた。戦時中、水を求めて集まった人々が、攻撃に遭い亡くなることもあつた。

場所/字真栄平1665

●爆雷を背負った初年兵

ある日の夕方、防衛隊員だつた父が斬り込みを命じられ、初年兵と二人で自宅の庭の壕にきた。一緒に夕飯を食べた後、初年兵が「わたし一人で行くからおじさんは残つてください」と言つた。父は「一人で行くわけにはいかない」と言つたが「自分は軍人。死ぬのは当然だ。今度の戦は必ず負ける。おじさんが死んだら妻も大変だから」と、押しつけて一人で爆雷を背負つて行つてしまつた。

それから、父は僕らと一緒に過ごしたが、数日後に米兵に捕まつた。父は、壕の中で替える家族に「もうダメだから出てきなさい」と呼びかけた。怖かつたが父が呼んだから出た。それから今の南北之塔のあたりまで歩かされ、目取真（現南城市）まで移動させられた。

●父との別れ、妹の死

移動の途中、周りを見ても青い木の葉は全く無く、採石場みたいに真っ白だつた。たくさん弾が落ちてい

て側には死人がいっぱい。地獄みたいだつた。

目取真で一晩過ごし、翌朝、家族は引き裂かれた。銃をもつた米兵に誘導され僕らは母と知念に行つた。父は佐敷から山原に連れていかれ、マラリアに感染して亡くなつたと聞いた。家族が一緒にいれど思つた。当時5歳の妹は赤痢で亡くなつた。病院もないし布団も毛布もない。カマスをかぶせて草を敷いてそこに寝かせて。本当に可哀想だね。

●戦争は絶対にいけない

子や孫たちにあんな惨めな思いはさせたくない。生きていく間は、機会があれば「絶対に戦争やつてはいけないよ」と伝えたいという思いがいつも心のどこかにある。

戦争は勝つても負けても絶対いいことはない。戦争は絶対やっちゃいけない。



きんじょう えいほ
金城 栄保さん

1934（昭和9）年生まれ。真栄平出身。糸満高等学校を卒業後、琉球警察巡查となり、首里、普天間、与那原、那覇などの各警察署や琉球警察本部警ら課、沖縄県警察本部運転免許課を経て糸満警察署に勤務。地域の治安維持に尽力し、2006年には「瑞宝単光章」を叙勲。子や孫たちに悲惨な経験をさせてはいけないとの思いで沖縄戦を語り継いでいる。

過去のシリーズは、ホームページでご覧になれます。沖縄戦における糸満市の情報は、「糸満市史資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で詳しく紹介しています。お問い合わせ 生涯学習課 8440・8163